

「ビキニ」「ヒロシマ・ナガサキ」は、どう逆用されたか

——『原水禁署名運動の誕生』・『巨怪伝』・『原発・正力・CIA』を読む

天野恵一

今回はガンディーから少し離れて、〈3・11震災〉後、私がある種の崩壊感覚とともに、必死で調べた問題について、ストリートに書かせていただく。

丸浜江里子の『原水禁署名運動の誕生——東京杉並の住民パワーと水脈』（凱風社）を読み終えて思った。この〈3・11〉以前に研究され書かれ、〈3・11〉以後に刊行（五月二〇日）されたものに対する私の不満は、おそらく〈3・11〉以後の時間で、アタフタと自分が考え調べたことがなければ、おそらく存在しなかっただろうナーと。

この本の出版社の宣伝ビラには、こう書かれている。「放射線物質の拡散による『恐怖』と『生活被害』は2011年の3・11福島原発人災事故と同様に、半世紀以上前にも起こった。『原子力の平和利用』（原発導入）を押し進める吉田政権（当時）の下、3000万人の住民が原水爆反対署名に立ち上がったが、その教訓は今、私たちに受け継がれているか！」。

これを読むかぎりは、「原水爆反対署名」（原水禁運動）

躍した人物たちが、敗戦後の運動を担い、多くは54年の原水爆禁止署名運動でも活躍する。敗戦後の記述は、占領期と50年代の歴史の杉並版であるが、女性たちの自主的な組織作りと生き生きとした活動、知識人と地域諸団体の平和センターとしての杉並懇談会など、50年代の『逆コース』に堪えるなから、協力を横に広げようとする成熟した政治意識が杉並に育まれていたことがわかる」（傍点引用者、『図書新聞』七月三一日号書評）。

私も（なぜ杉並で原水爆禁止運動が起こったのか）を、固有に「杉並」にこだわり、こまかく（資料のあたりだけではなく、ヒヤリングをも繰り返し）歴史的に検証してみせる作業に「めっっぽう面白い」思いをしなかったわけではなかった。

しかし、である。丸浜はビキニ環礁での異変をいち速く知って動きだした杉並区高円寺の気象研究所の活動を紹介しているくだりで、「日本気象学会」の以下のくだりを含むビキニ水爆実験に関する声明を紹介している。

「①原子力兵器を含めたすべての大量殺害兵器の実験・製造・使用の即時禁止と原子力の国際管理及び平和的利用の実現に努力すること」（傍点引用者）。

「平和利用」（原発推進）のイデオロギーと対立するどころか、それと「原水禁」運動が共存してしまっている事実を、批判的に読み抜くことが今こそ必要ではないか。丸浜が本書の中で参照文献として紹介している、読売新聞と

は、権力者の「原子力の平和利用」（原発導入）に抗する運動であったということになる。しかし、丸浜の、おそらくこのテーマについてのものもとても詳細なこの研究書は、それがそういう質を持ったものではなかったという事実をこそ明らかにしてしまっているのではないか。

例えば、「様々な団体や個人が政治的立場を超えて原水爆禁止の一点で結ばれていった。そのダイナミズムが克明に描き出されている」という『朝日新聞』（六月十九日）の書評の評価に、さらには、一九五五年から五九年まで原水協で安井郁事務局長下の事務局員だったという武藤一羊の次のような評価には根拠がないと思ったわけではない。「丸浜は杉並という地域の成立史から始めている。1889年の汽車の開通からである。この部分はめっっぽう面白い。1923年の関東大震災の自警団から町内会が生まれるが、1926年になって戦後杉並区長になる新居格や奥むめおなどの手動で消費組合が生まれ、急速に拡大する。やがて弾圧の前にそれはつぶされるが、この時期に活

日本テレビのドンであった正力松太郎伝である佐野真一の『巨怪伝——正力松太郎と影武者たちの一世紀』（文藝春秋、一九九四年）には、こうある。

「アイゼンハワーズの『アトムズ・フォー・ピース』演説からわずか三カ月あまりの後の第五福竜丸の被爆は、アメリカに深刻な打撃をもたらしていた。ダレス国務長官は、被爆の事実を糊塗するため、ビキニ患者は放射能によるものではなく、『血清肝炎』によるものと決めつけ、彼らは『スパイ』の可能性もあるとささえた。その上でダレスは『日本人は、原発アレルギー』にかかっている』と結論づけた」。

このように、原子力の平和利用は当然で、それにまで反撥するのは「アレルギー」（病気）だという「平和」VS「アレルギー」という論理は、アメリカ（ダレス）の政治的都合で持ち込まれた論理であることを示した後、佐野は、こうした歴史的事実を提示している。

「日比谷公会堂で開催された原子力平和利用大講演会のもようは、日本テレビを通じて生中継され、会場からあふれた聴衆に対しては、大型の街頭テレビが特設された。その手法は、プロレス中継や巨人戦の中継と、まさに同じだった。／五月二十七日に原子力平和使節団が離日して約一カ月後の六月二十一日、ワシントンで濃縮ウランの貸与に関する原子力協定が仮調印された。／『毒をもって毒を

制する。柴田の戦略は、着々と成功をおさめていた。／その総仕上げが、三十年十一月一日から十二月十二日までの四十日間にわたって、日比谷公園で行なわれた原子力平和利用博覧会の開催だった。これは、柴田がD・S・ワトソンをワシントンに折衝させた結果生まれた企画で、アメリカ原子力委員会と国務省広報局が中心となり、経費は一切アメリカもちで行われたものだった。／会場には、原子力列車や原子力旅客機などの模型が並べられ、原子力の「明るい未来」を謳いあげた。最大の呼び物は、前年の三月、ビキニ環礁で被爆した第五福竜丸の展示だった。正力は、世紀のスクープと騒がれ、原水禁運動のシンボリック存在となつた第五福竜丸まで逆手にとり、原子力平和利用の「興業」に仕立てあげた。／当時、読売の企画部長で平成四年五月に死亡した村上徳之は、『決死の原子展』と題する次のような文章を残している。／「展覧会場での苦心談を拾うと、コバルト六〇を放射した水槽で、亀と金魚の実験をやつたが、付近は相当強い放射能があり、鞆帯に影響なしとせずなどと専門家が忠告したので、このカウンターの操作実験に当たつた東大生がこわがってご免蒙るなどいい出した。これには困つた。／またコバルト六〇を移植した金魚は、三、四日で死ぬ。しかし、死んだ金魚でもむやみに捨てられぬのだ。大切に保管して東大にもちこみ、コバルトを金魚の腹から摘出して貰うのである。これも大変な仕事だ。／しかし、なんといつても、福竜丸の実物資料が展

1・ハーヴィ・オズワルド・CIA・メキシコシティ』というCIA文書（二〇〇三年公開）に出てくる。それによれば、一九六三年当時、彼はCIAメキシコシティ支局で副支局長を務め、暗殺犯オズワルドの現地での活動を監視していた。／NHKのテレビ番組『原発導入のシナリオ』（一九九四年三月放送）の中にも自ら『スタンレー・ワトソン』と名のる人物が出てきて、第五福竜丸事件以後のアメリカの心理戦について能弁に語っている。／柴田によれば、彼はこの『ワトソン』と『源』という寿司屋でたびたび会い、わさびとタバスコのいづれが辛いかという談義に花を咲かせたとしている。その記述からは、二月三十一日以前から頻繁に会つていたという印象を受ける。／むしろ柴田と彼が話した内容は決してわさび・タバスコ談義だけではなかった。CIA正力文書はこのときの会合で柴田が『原子力平和利用使節団』の趣意書を局員に渡し、アイゼンハワーの『アトムズ・フォー・ピース』キャンペーンを行っているあいだ我々を指導してほしいと要請していたことを明らかにしている。要求の具体的内容は以下のようなものだった。

1、日本は広島・長崎で原爆の被害を直接受けただけでなく、最近ビキニ環礁で水爆の被害も受けた。世界初にして唯一の被爆国であつて、このような核兵器を開発したアメリカに対する憎悪は根強い。これを共產主義者が反米プロパガンダに利用していることは明らかだ。

覧会のヤマだ。福竜丸が繫留してある静岡県焼津まで部員が飛び、貴重な資料をもち帰つたが、当時まだ相当放射能に汚染されており、物によつては毎秒一万から三万カウントもある。こうなると体を張つての仕事だ」（傍点引用者）

「被爆体験」は平和利用（原発推進）に、このように大々的かつ具体的に「逆用」されたのである。

ここで佐野がふれている「柴田」と「ワトソン」の交渉について、有馬哲夫は『原発・正力・CIA——機密文書で読む昭和裏面史』（新潮新書、二〇〇八年）で、このように論じている。

「暮れも押し詰まつた一九五四年十二月三十一日、正力の腹心、柴田秀利（後の日本テレビ専務）は、東京の某所でCIA局員と会つていた。この男を柴田は自らの著書『戦後マスコミ回遊記』のなかで、『D・S・ワトソン』と呼んでいる。柴田は同書で『この決して肩書きを明かさなない』男がCIA局員ではないかと疑つていたと書いている。／一方この局員のほうは、CIA本部への報告書に『柴田は自分を政府の職員とは思つているがCIA局員とは明確に認識していない』と書いている。これと同一人物かどうかはわからないが、ダニエル・スタンレー・ワトソンという名前は一九九六年にアメリカ下院（J・F・ケネディ大統領）暗殺記録特別調査委員会に提出された『リ

2、このようにソ連が平和攻勢をかけている中で日本では総選挙が行なわれようとしているが、日本の保守系政党は情けなくも分裂しているため親米保守の足場が危うくなっている。

3、このような問題を解決するにはジョン・ジェイ・ポプキンス他、原子力の専門家を日本に招聘するのがもっとも効果的だ。

4、この使節団を派遣するなら、総選挙に十分影響を与えうるように、来年（一九五五年）の初めか、遅くとも二月の初めにはそれを実現する必要がある。使節団を迎えるだけではなく、讀賣グループをあげて原子力平和利用啓蒙キャンペーンを張る用意がある。

5、現在我々はニューヨークのユニテル（注・文章にはこうあるが、実際にはジェネラル・ダイナミック社）副社長のウエルシュ氏とコンタクトをとっている。

6、このプロジェクト推進に協力いただければ幸いである。従来、『原子力平和利用使節団』については、アメリカ側から正力に、費用もアメリカ側が負担するということが説明があつた。だが、このCIA文書は俗説とは違う事実を示している。つまり、提案したのはあくまで正力のほうであつて、アメリカ側ではなかったこと、費用負担も正力が求めたのであつて、アメリカのほうから申し出たのではないことだ。／また、この趣意書でも明らかのように、正力は使節団の中心メンバーも訪問スケジュールもあらかじ

め自分で決めていて、それを以前から『ワトスン』・ルートとは別にユニテル社経由で交渉していた。つまりユニテル社社長ホールステッドとジェネラル・ダイナミック社副社長のウエルシュを通して、ポプキンスに提案していたのである。／正力は前年の末にホプキンスがアメリカ製造業者協会で『原子力のマーシャル・プラン』を発表し、日本の経済界や電力業界に大きな波紋を起したことから、これを好機と考えた。このようなときに、彼を招いて講演会を開くといえ、経済界や電力業界は身を乗り出してくる。そこで懇談会を立ち上げ、自らがそれを主宰すれば、原子力ビジネスを議論する旗頭になれる。そこで正力は柴田を通じて『原子力平和利用使節団』を日本に派遣するよう『ワトスン』に申し出たのだ。／『ワトスン』はこれに對して、してやったりと思っただろう。アメリカ政府がこれを受け入れ、『原子力平和利用使節団』が訪日し、これを讀賣グループが大々的に取り上げれば、当時の、反原子力・反米運動を沈静化させる絶好の心理戦になる。しかも、それをプロデュースした功労者は自分なのだ。／アメリカの在日情報機関は、第五福竜丸事件のあとに澎湃とわき起こった原水禁・反米運動によって窮地に立たされて、事件後数ヶ月で三〇〇〇万人の反対の署名を集めるまでに高まったこの運動に對処するために、彼らはそれまでの對日心理戦を見直さざるを得なくなった。見直したあとで、ただちに、あらゆるルートを通じて、あらゆる方策を講じな

こまれてしまうことはあっても、キチンと批判的に對置できなかつた。いや、被爆体験は米日の支配者たちに積極的「逆用」され続けたのである。

丸浜は、『原水禁署名運動の誕生』のラストで、その二年間の運動をトータルに評価し、「また、太田昌克（共同通信編集委員）は一九五五年一月にチャールズ・E・ウィルソン米国防長官が日本と核貯蔵や使用に関する取り決めを結ぶことを表明したが、原水禁署名運動の広がりを知るアリソン駐日大使の反対で挫折を余儀なくされたことを明らかにした。原水爆禁止署名運動の広がりが米国の対日戦略Ⅱ極東戦略を変更させた事実は戦後運動史に特筆すべき出来事ではないだろうか」と語っている。

平和利用（原発推進）キャンペーンというアメリカの「対日心理作戦」が全面的に貫徹されてしまったという歴史事実をふまえれば、こうした評価はあまりにも一面的ではないだろうか。

あらゆる政治的立場の違いを超えて、抽象的に原水爆禁止一点で全人類的に団結するという、新たな平和運動が新しい可能性をつくりだしたことは事実だろう。しかしその「幅の広さ」は原爆と原発（平和利用）をまったく別のものとするイデオロギー操作に抗しうる質を、結局持ちえなかつたのではないか。

「ビキニ」（ヒロシマ・ナガサキ）の逆用によって推進された戦後日本の原発大國化のゴールが「フクシマ」(3)・

ければならなかつた。／このようなルートのなかには当然讀賣グループも入っていた。『ワトスン』が柴田に寿司屋でしばしば会うようになったのは、対メディア工作の一環だった。当然、正力はアメリカ情報機関が当時の状況にどれほど危機感を持ち、そこから脱するためにどれほど必死になっているかを柴田から伝え聞くことになった。／しかし、当初正力はまだマイクロ波通信網建設に全身全霊を傾けており、アメリカの窮状を自分がどのように利用できるかわからなかつた。『正力マイクロ構想』がいよいよ壁に突き当たり、総理大臣を目指すべく原子力平和利用導入を旗印にしようと考え、至つてようやく、それが自らの野望の達成に大いに利用できることに気がついたのだ。ここでテレビ導入のときと同様、アメリカの対日心理戦と正力の野望とは幸福な出会いをするのだ。（傍点引用者）。

「対日心理戦」をしかけたアメリカ側は、「原爆Ⅱ原発」であることを十二分に自覚的であつた。だから「平和利用」キャンペーンを、署名をテコとして高揚する運動を「沈静化させる絶好の心理戦」と位置づけたのである。

ノーマア、ヒロシマ・ナガサキの声を組織した巨大な「原水禁運動」をうみだした「原水禁署名運動」は、原爆と原発（平和利用）をまったく別のものとするアメリカじかけの「対日心理作戦」のデマゴギー（被爆体験があるからこそ原子力平和利用を、というキャンペーン）に、まき

11)である。

だとすれば、(3・11)後の今、私たちが試みなければいけないのは、「逆用」の歴史を、その起源にまでさかのぼつて批判的に検証する作業ではないだろうか。

「神話化」されている主婦たちの杉並署名運動の歴史を、これ以上ない緻密さで肯定的に描きだした丸浜の力作を讀みおえて、私は、その「神話」に思想的なメスを入れる作業の必要こそ実感した。

(3・11)以後、この「逆用」の問題を集中的に批判的に解剖した、シャープな論文が二本ある。一つは加納実紀代の「ヒロシマとフクシマのあいだ」(インパクション180(二〇一一年六月)号)であり、もう一つは田中利幸の「原子力平和利用」と広島 宣伝工作のターゲットにされた被爆者たち」(世界2011年八月)号)である。ついでに、「ビキニ市民ネット焼津」編の『焼津流平和の作り方——「ビキニ事件50年」を超えて』(社会評論社、二〇〇七年)も手にして調べたが、そこには「第五福竜丸」が東京で原子力平和利用キャンペーンに逆用された歴史は、どこにもふれていなかった。この欠落は運動史の盲点の存在をハッキリ示すものではないか。

(あまの やすかず／本誌編集員)